

保護者の皆様へ

道徳の授業の様子の一部を紹介します。ご家庭で、お子様と授業の感想など話し合ってくださいと幸いです。カラー版はHPでご覧下さい。

## 2年生

### 「命が生まれるそのときに」

「いのちの音」は、お母さんのおなかの中にいたときから、ずっと心臓が鼓動していることを表現した林佐知子さんの詩です。「『生きている』と感じるとき」は、出産を撮ることをライフワークとするフォトグラファー繁延あづささんの文章です。繁延さんは、どんなときも「生きている」と感じる姿を見て尊いと思う自分でありたいと願い、そう感じられる写真を撮りたいと言っています。

#### D(1)生命の尊さ



命についての詩と、出産を撮影するフォトグラファーの文章や写真を通して、「生きている」ことの尊さについて考えました。



生きていることが当たり前ではなく、親が懸命に産んでくれたので、自分の「命」を大切に生きていこうと改めて思いました。

自分の「命」はもちろん他者の「命」も同じくらい大事にしていきたいと思いました。

「命」は、自分にとっても、周囲の人にとっても自分の「命」は大事である。だからこそ、毎日を大切に生きていこうと思いました。

親からもらった1番大切で、お金では買えないものが「命」だと思った。なので、命を大切に、楽しく生きていきたいと思いました。

## 1年生「三百六十五×十四回分の『ありがとう』」

C(5)家族愛  
家庭の充実

柳橋佐江子さんは手術直前に、お母さんに手紙を渡しました。それは、「十四年間、私を育ててくれてありがとう。」という言葉で始まります。これまで自分を支えてくれたお母さんとの思い出を振り返り、「私がつらいときは、お母さんも同じようにつらい。だから私は、『手術、がんばってくるからね』ではなくて、『手術、がんばろうね。』と言いたい」と綴っています。十四年間分、三百六十五×十四回分の「ありがとう」とは、佐江子さんのお母さんへの思いが詰まった言葉です。



心臓病をかかえている柳橋佐江子さんが、三度目の手術を受ける前にお母さんに渡した手紙を通して、家族について考えました。

教材を通して、毎日のようにお世話になっているお母さんに「ありがとう」の思いを改めて持つことができた。



C(1) 遵法精神  
公德心



## 3年生「二通の手紙」

動物園の入園係をしていた元さん。ある日、幼い弟の手を引いて入園料を握りしめた女の子がやって来ます。弟の誕生日だから中を見せてやりたいと言うのです。二人は、いつも入場門から園内をのぞいていた姉弟でした。保護者同伴でなく、入園時刻も過ぎていましたが、何日もこの子たちの様子を見ていた元さんは、二人を中に入れてやります。しかし、二人は閉園時間が過ぎても戻ってきません。職員総出で探し、やっと二人を見つけました。後日、そのことで姉弟の母からは感謝の手紙が届きます。しかし、一方で元さんは上司に呼ばれ、「停職処分」の通告の文書を受け取ります。

規則より心情を優先させたために起こったトラブルを描いた物語を通して、規則は何のためにあるのかを考えました。

最初はやってよかったと思っていたが、意見を聞くと、子どもたちの命が危ないと思ったので、規則の大切さを感じた。

規則を守ることは、安全で楽しい生活を送れることに繋がり、規則を破ることで大きな危険があると思った。だから、規則はしっかり守ろうと思った。



情が入る気持ちは分かるが、一時の気持ちよりも、その先に何が起こってしまうかを考えないといけない。だから、規則を守ることは大切なことだと改めて気づかされた。

